

現代フィジーの村落における嗜好品カヴァの生産・消費の変容

## The Transformation of Kava Production and Consumption in Contemporary Fijian Villages

大島崇彰(東京都立大学大学院 人文科学研究科)

OSHIMA Takaaki(Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University)

### 1. 和文アブストラクト

本研究は、現代フィジー共和国における嗜好品カヴァの生産・消費の変化を明らかにすることを目的とした。フィジーの村落にて参与観察と聞き取り調査を行い、カヴァの儀礼的使用、日常的飲用、生産の動向を記録した。

カヴァは現在も宗教儀礼や首長就任の場で飲用されている一方、平日を含む日常的な消費が増加しており、また公共的利用を目的とした資金集めのカヴァ飲用も頻繁に開催されている。そうした飲用には慣習的には見られなかった若年層や女性の参加も見られた。

生産面では、1990年代後半に、カヴァの価格高騰に目をつけた農家たちによるカヴァの商業的栽培への関心が高まった。そして2016年のサイクロン以降の顕著な価格上昇を契機に、栽培規模の拡大が複数の農家で確認された。一部の農家ではカヴァのみが主要な現金収入源となっていた。

他方、日常的な飲用による健康や生活への影響を懸念する声や、宗教団体・教育機関からの注意喚起が見られた。国際的にも健康リスクが議論されるなど、課題も見られる。

本報告は、カヴァの生産と消費の実践が従来の慣習的な枠を越えて展開している現状を示し、現地社会における動態を明らかにしている。

### 2. 英文アブストラクト

This study explores the changing patterns of production and consumption of kava (yaqona) in contemporary Fiji, based on fieldwork conducted in a village in eastern Vanua Levu. Through participant observation and interviews, the research documented its ritual use, everyday drinking practices, and cultivation trends.

Kava continues to play a role in religious and chiefly ceremonies; however, its daily use—now including weekdays—has notably increased. It is also consumed in fundraising gatherings for public purposes, with growing participation from youth and women, who were traditionally excluded.

On the production side, commercial interest rose in the late 1990s, following price increases. After Cyclone Winston in 2016, prices surged again, prompting several farmers to expand their cultivation. In some households, kava now serves as the main source of cash income.

Concerns have also emerged regarding the health effects of frequent consumption, with warnings issued by religious organizations and schools. Globally, the potential health risks of kava continue to be debated.

This report shows how kava practices have extended beyond customary frameworks, reflecting ongoing social and economic transformations in Fijian communities.

### 3. 研究の目的

本研究の目的は、フィジー共和国において儀礼などの際に広く利用されてきた植物を原料とする飲用嗜好品カヴァに注目し、近年顕著になったカヴァの急速な商品作物化に伴い、村落でのカヴァの生産および消費がどのように変容しているのかを明らかにすることである。具体的には、カヴァ栽培の畑地造成が進むヴァヌアレブ島 V 村落における実地調査から、①伝統的なカヴァ栽培および飲用の特徴、②1990 年代以降のカヴァ生産の拡大の実態（特に村落の生業・経済への影響）、③1990 年代以降のカヴァ消費の変容の実態（特に文化的意味への影響）、を明らかにする。

### 4. 研究の方法

実地調査では、V 村落で質的調査を行う。まず、①村の有識者を対象に、伝統的なカヴァ栽培および飲用の特徴について聞き取り調査を行なった。次に、②世帯を対象に、近年のカヴァ栽培の拡大の実態について、参与観察および聞き取り調査を行なった。さらに、③村落内での儀礼・集会を対象に、近年のカヴァ消費の変容の実態について、参与観察および聞き取り調査を行なった。

実地調査と並行して、南太平洋大学図書館 Pacific Collection、国立公文書館 Fiji National Archive、Savusavu Agriculture Center などにおいてカヴァにまつわる文献史資料の収集を行い、伝統的なカヴァの文化的役割に関して分析した。また、フィジーにおけるカヴァの栽培・生産に関してマクロな視点から量的把握するために、カヴァの生産量・消費量・輸出货量や価格等に関する統計データを、南太平洋大学図書館、官公庁等にて収集した。国内においても入手可能な資料の収集整理を行った。

### 5. 研究成果

#### ■ カヴァに関する基本情報

カヴァとは、コショウ科に属する多年生の灌木の一つのことであり、学名は *Piper methysticum* と呼ばれている[写真 1]。成長すると時に高さは 3 メートル以上にもなり、4 年以上生育した木にもなると、根もいれて全体で 130 キロ以上の重さになることもある [Lebot 1995:20]。カヴァの呼称に関しては、土地ごとに異なり、トンガではカヴァであるが、サモアではアヴァ、ハワイではアワ、メラネシアのヴァヌアツではカワカワ、ミクロ

ネシアのポーンペイ島ではシャカオ、そしてフィジーではヤンゴナと呼ばれている。

カヴァの有効成分に関する研究データは少ないものの、医学および植物学の研究によって、カヴァの根には、カヴァラクトン及びアルカロイド系の化合物などが複数含まれていることが明らかにされつつあり、摂取した場合、その鎮静作用によって、筋弛緩などを伴う酩酊が摂取者にもたらされる [Lebot et al. 1992]。主にポリネシア地域を中心とした、オセアニア島嶼地域の広い範囲では、鎮静作用をもたらす成分が含まれるカヴァの根茎を加工することによって作られる飲料が古くから儀礼の際などに飲まれてきた。

カヴァの作り方に関しては、基本的には、カヴァの根もしくは茎をある程度細かくしてから、石や木の棒で叩き潰し、そこに水を加えて、布などで濾すという手順を踏むとされている[写真 2、3]。パプアニューギニアの一部の地域や、ポーンペイ、ヴァヌアツ、ウォリス・フツナ島ではカヴァの根茎は収穫後すぐに加工され使用されるが、フィジーやサモア、トンガでは、収穫後乾かしたものが使用される [Lebot et.al 1992]。また 1980 年代ごろから、水に濾して飲むために粉末状になったカヴァが国内や海外の島嶼系移民を中心として流通し始めた。近年ヨーロッパ諸国、オーストラリアやニュージーランド、そしてアメリカではカヴァの有効成分を抽出した薬品やサプリメントも普及している。現在フィジー国内では、大きな市場などにはカヴァ売り場があり、束にしたカヴァの根や粉末が容易に手に入る[写真 4]。また粉末にしたカヴァを小袋に入れたものがどこの市場や商店でも販売されており、比較的都市部に近いところに住む人々はそこでカヴァを購入する。村落部においては基本的に自分たちで育てたカヴァを消費することが多く、筆者の調査地でも消費するカヴァは村落の畑で栽培されたものを、村落価格で譲渡・売買し飲用するのが中心である。

カヴァの飲用には、大別して、(1) フィジー、トンガ、サモアなど社会の階層性が発達している地域にみられる、貴族や高位の人が出席する非常に形式性の高い儀礼的飲用、(2) 村落内で執り行われる年配者及び首長間の会合や、他の地域から首長や高位の人々が訪ねてきた際に行われる儀礼的飲用、それらの公式の儀礼のほかに(3) それ以外の非儀礼的・非公式な飲用、の三つがあるとされる [Singh 1992]。

カヴァ儀礼の中で最も形式性が高く厳かなものが、貴族や高貴な人を招いたもの、もしくは首長の就任式でのカヴァ儀礼である。フィジーの例で言えば、外国の首相やイギリス王室の人々、トンガの王を迎え入れるときに執り行われるもの、地域の首長の就任式（現地では *vagunu* と呼ばれる）のものである。こうした儀礼においては、ゲストの席次や参加者の席次は厳格に定められているだけではなく、カヴァを作るための器の位置やその置き方、準備や配膳における所作やそれを行う人物も厳格に定められており、飲用に至るまでの過程が厳格に形式化されている。

村落内で行われるカヴァ儀礼に関しては、重要なコミュニティ内での活動（結婚式、葬式、入村・離村儀礼、客人を迎える際に行う儀式など宴）の開始時、進行中、終了後など、

伝統的なプロトコルに基づき執り行われる。こうしたカヴァ儀礼は、高貴な人々を出迎えたカヴァ儀礼よりも形式的ではないものの、準備や配膳、順序に取り決めや暗黙の了解があるのは同じである。例えばフィジーでは、カヴァ儀礼における席次や飲む順番がかなり意識される。村内でのカヴァ飲みの場合、マタンガリ（≡リネージ）のヘッドや年長者が最初の1杯を飲み、その後1杯目を飲んだ人の若い親族、もしくは逆に彼への敬意を強く示すため近い年齢の年長者が少し多めの2杯目を飲む。この行為はランベ（Rabe）といい、フィジー社会の階層性を象徴する所作と言える。これをワンセットとして、ついで村外からの訪問者、もしくは年長者が飲むと言ったような順番となり、合間合間にはランベが入る。そして筆者の調査村では宴の最初1杯目のカヴァを飲む際には、カヴァの入った器をサーバーから受け取る際にはブラ（Bula）と言いながら一度手を叩いた後、器を受け取り、飲み終わった時にはマザ（Maca;直接的には乾いたという意味だが、ここでは飲み干したという意味）と言い、三度手を叩くなどの作法が決まっている。この時周りの参加者もマザといい同じように手を叩く決まりである。

こうしたカヴァのフォーマル／セミフォーマルな儀礼での飲用のほかに、非公式の世俗的なカヴァ飲用が行われ、フィジーではタラノア（Talanoa おしゃべりの意）セッションと呼ばれることもある。そうした飲み会では、参加者の顔ぶれにもよるが、一連の決まった作法や儀礼的な手順は厳格には定まっていない。Tanoa と呼ばれるカヴァを入れる器を使うのが伝統的なやり方であるが、現在フィジーではカヴァを作る器はプラスチックの容器が用いられることさえある。他方でそうした宴においても、飲用前、飲用中にカヴァへの感謝を伝える祈りを捧げるなど、少なくとも参加者がカヴァに敬意をこめて扱っているという部分はそのほかのカヴァの儀礼での飲用と共通している [e.g. Singh 1992:35]。またこうしたフランクな宴においても先述のようにブラと言いながら器を受け取るのは変わらないほか、先述したように最初の1杯目にはその場にいる中で最も年長の人間や、筆者のようなゲストが選ばれる。こうした日常的な飲用は仕事終わりの夕方から始まり、翌日の朝まで続くこともある。



写真 1：カヴァの木（2022 年筆者撮影）



写真 2：カヴァの根を乾燥させ、粉末状にパウンディングしたもの（2022 年筆者撮影）



写真 3：粉末状にしたカヴァを水に濾して飲む（2024 年筆者撮影）



写真 4：市場のカヴァ売り場の様子（2023 年筆者撮影）

## ■ V 村落の概要

調査地である V 村落は、首都スヴァのあるヴィティレヴ島の北東に位置し、面積、人口規模ともにフィジー第二の島であるヴァヌアレブ島のザカウンロベ州南東部に位置する村落である。カヴァを卸す市場があるサブサブの街までは車で 1 時間半ほどの距離に位置する。街と村落をつなぐバスが 1 日に 1 往復しており、早朝村を出たバスは途中の学校に学生を下ろした後、街まで行き、午後にまた街を出て、学生を拾い、夕方村に到着する。

住民はほぼ先住系フィジー人であり、現在 49 世帯、人口は公式には 417 人とされているが、入れ替わりや空き家もあるため、実際はそれよりは少ない印象である（インド系は婿にきた 1 人だけ）。三つのマタンガリ<sup>1</sup>、S、V、R が存在し、それぞれには基本的には血統に基づいて継承される代表(Tui Mataqali)がいる。またそれとは別に、村内の行政レベルでの代表であり、行政との連絡係でもある村長(Turaga ni Koro)にあたる人物も存在し、村人の総意によって選出される。そして村内には三つのマタンガリを束ね、村を含む地区(Tikina) 一帯を統治する伝統的首長が居住しており、彼は V 村落を含め、いくつもの集落を擁する N 地区の首長である。R マタンガリは彼の家族(Tokatoka)を有するマタンガリであり、首長のマタンガリ(Turaga matagali)とされ、R マタンガリは土地の保有面積、世帯数では最大のマタンガリになる。S マタンガリは副リーダーのマタンガリである(Sauturaga matagali)。V マタンガリは同じく首長のマタンガリを支えるマタンガリとされ、伝統的には首長の戦士のマタンガリ(Bati matagali)である。

村落内の活動は、マタンガリ内及びマタンガリ間における日常的な共助、協力関係に基づいて営まれる。それぞれのマタンガリは広大な土地を所有しており、成員は基本的には自らのマタンガリの土地を利用して農業を営んでいる。筆者はそのうちマタンガリ R の一員として調査を行なっている。

V 村落の生業は、主として農業である。ダロ芋、キャッサバ、ココナッツ、バナナ、プランテンが栽培されており、そして季節によってはマンゴーなどの果物類が収穫でき、それらは主に自家消費されるが、一部の家庭ではサブサブの市場にも卸し、現金獲得の手段としている。また海に面していて、漁業も盛んである。こちらは自家消費もしくは村内での売買が主であるが、こちらの一部の住民はサブサブの市場もしくはサブサブの近くの鮮魚店に卸している。短期契約で街での賃金労働するものはいるが、農業との兼業も含め 3 世帯ほどである。全世帯のうち、約半数の 25 世帯が（栽培規模や世帯収入における割合こそ多様であるが）カヴァの栽培を行っており、さらにそのうち半数以上の 16 世帯が R マ

---

<sup>1</sup> 氏族。フィジーの社会構造は、トカトカ/tokatoka（拡大家族）＜マタンガリ/matagali（氏族集団）＜yavusa/（部族集団）となっている。行政単位は、コロ/koro（村）＜ティキナ/tikina（地区）＜ヤサナ/yasana（州）となっている。フィジーにおいては国土の 8 割ほどが先住系フィジー人の所有となっており、マタンガリは土地所有の単位になる。



タンガリの構成世帯である<sup>2</sup>。それらの世帯ではまとまった現金獲得の手段としてカヴァの売買が主要な手段となっている。

村内には電気は通っておらず、各家庭には政府の支援によって設置されたソーラーパネルが設置されており、バッテリーに蓄電して夜間の電灯などに利用している。調理などでガスを使用する家庭は少なく、主に薪や石油ストーブなどを利用している。村内には4店舗ほど小売店があり、小麦粉、インスタント麺のほか、洗剤、お菓子などの日用品が手に入る。またカヴァ農家の中には、粉末状にしたカヴァを売るものもいる。

## ■ カヴァの消費の実態および変化

### ・ 伝統的なカヴァの飲用および使用

先述したように伝統的なフィジー社会においてカヴァは宗教儀礼、政治的な儀式、冠婚葬祭などの正式な場で不可欠な要素であった。それは現在でも大きく変わらず、筆者の調査地で2024年10月に行われた首長の正式な就任式ではカヴァは中心的な役割を担っていた[写真5]。首長の就任式は、Vagunuと呼ばれ、筆者の地域では、副リーダーのマタンガリが首長に就任する人物にカヴァを飲ませることで、その者に土地の力が付与され、土地及びそこに住う人々から、首長として正式に承認されると考えられている。村人によれば、カヴァはヴァヌア（Vanua；土地）のマナ（Mana；訳し難いが、力のようなもの）の象徴であり、儀礼においてカヴァを飲むことで首長はヴァヌアの力を付与される。その結果、彼の言葉や行為には以前とは異なる畏れ多い権威が宿るそうだ<sup>3</sup>。また就任式のカヴァ儀礼では参加者全員が厳格な序列に従って飲用していたことが確認された。またカヴァは宗教的



写真5：首長の称号授与式におけるカヴァ儀礼の待機中の様子（2024年筆者撮影）

<sup>2</sup> これはRマタンガリが保有する土地が村に近く、広大であること、そして他のマタンガリの成員は、カヴァに否定的な教会に所属していることが要因と言える。

<sup>3</sup> 首長の就任儀礼におけるカヴァ飲みの象徴的意味に関しては、サーリンズ[1993]などに詳しい。

行事においても重要な位置を占めている。例えばカトリック教会やメソジスト教会では、日曜日の集会後やそのほか教会行事の後に、懇親の場として頻繁にカヴァ飲みが行われているようだ。このようにカヴァは依然として伝統文化の中核にあり、共同体の社会構造や紐帯を強めるトークンとして役割を持っているとされる。

#### ・カヴァ消費の現状

儀礼でのカヴァの飲用は引き続き重要なプロセスである一方、日常的な飲用が現在に至るまで増加している。これは村落部だけの話ではなく、フィジー全体の傾向と言える。現状、消費量に関する公的な調査は管見の限りなされていないが、2016年の新聞記事によると、フィジー全体では、1日あたり75万ドル（フィジードル）、1週間では525万ドル、1年では2億7千万ドル、カヴァを消費しており、少なくとも25万人の国民がカヴァを消費しているともされる（現在の人口は92万人）[The Fiji Times: 2016]。1998年の調査では、1日あたりの消費額は26万ドルとされていた[The Fiji Times: 2016]ため、顕著な増加と言える。従来、カヴァの日常的な飲用は、村の集会所や家庭内で飲まれるものであったが、現代では市場、小売店、ホテルなどでも販売されるようになった。都市部では「カヴァ・バー」と呼ばれる飲用施設が登場し、若者を中心に利用されている。これにより、カヴァの消費は特定の儀礼や村落社会に限定されず、より広範な場面で嗜まれるようになった。

V 村落では30年ほど前までは、カヴァは週末に飲むだけであったという。しかし現在は、週末はもちろん、平日にもカヴァの飲用は行われており、それに加え村の集会などのイベントがあるごとにカヴァ飲みを行うため、1週間のうち安息日である日曜日以外は全てカヴァを飲むということもよくあるとのことである（日曜日に飲むこともある）。カヴァ飲みは深夜1時過ぎまで行われることも多い。そうした飲み会では、平均して一人当たり2リットル以上のカヴァを飲む。

またカヴァ・バレルという、村や村の学校の公益に適う目的のための資金集めのカヴァ飲みが頻繁に行われている。参加者は一定額の寄付を支払い（1人10フィジードルほどである）、深夜まで歌や踊りを交え楽しむ。毎回50人以上の参加者が集まり、学校やコミュニティの貴重な活動資金となっている。他方、筆者の調査中には、同じ週に2回のカヴァ・バレルがあるなど、その頻度は昔に比べ増加傾向にあると村の人々は口々に述べていた。

また消費のあり方の変化として顕著なのは飲用層の拡大である。伝統的にはタブー視されることもあった女性の飲用、若年層の飲用が増加している。筆者の調査中も、若い女性が飲用する姿はよくみられ、クリスマスなどの大きなお祝いの際には、村内各所でカヴァの宴が開催されており、その席には幅広い年齢層の人々が参加している。ある年長の男性によると、彼の若い頃でも女性が飲むことはあったが、基本的には高齢の女性であったという。ある50代の男性は、「ヤンゴナの消費量は確実に増えている。昔は現在のように大規模に栽培もせず、これほど頻繁に飲むことはなかった。今では毎日のように飲んでいて



大変だ」と述べている。彼の証言によれば、後述するように過去数十年の間に栽培規模が拡大し、人々が日常的にカヴァを大量に入手できるようになったことで、飲用頻度が飛躍的に高まったと考えられる。

また若年層～中年層のカヴァの飲用の特徴として、カヴァの飲用後のアルコールの飲用（フィジーでは、ウォッシュダウンという）も指摘された。すでに説明したように、カヴァを飲用すると独特の痺れが舌や喉に残る。それをスッキリさせるために、ビールなどのアルコールを締め込むのである。暗黙の了解として、村内でのアルコールの飲用は禁止されているのであるが、「ウォッシュダウン」の習慣は現在では若者を中心に広く見られる。大きなイベント後では、酩酊した人々の叫び声が村内に響き渡り、年長者たちが眉を顰めるという光景が何度となく見られた。これも近年のカヴァ飲用の消費のあり方の変化の一つと言えるだろう。

## ■ カヴァ生産の実態および変化

### ・ V 村落におけるカヴァ生産

V 村落には現在カヴァを育てる農場は複数あるが、その最大の規模を誇るのは R マタンガリのカヴァ農場である。畑は村落から 1 時間ほど山道を登って行った山の頂上付近にある。道中は整備されておらず、農場に着くだけでもかなりの労力を必要とする。カヴァは日当たりのいい山の傾斜地で育てられており、農家たちの中には頂上に設営されたキャンプに数日ほど滞在し、カヴァの手入れ、雑草の処理を行うものもいる [写真 6]。カヴァが市場で取引できるようになるまでには最低 1 年以上生育させる必要があり、取引されるのは根の部分と、根に近い茎の部分のみである。根（waka と呼ばれる）は高額で取引され、おおよそ他の部分の 2 倍近くの価格で取引される。長く時間をかければかけるだけ根や茎は大きくなり、単純にその分収入は多くなる。根や茎以外の部分は、収穫後に再度植え付けし、また数年後の収穫を待つ。カヴァの収穫は大作業である。3 年以上育ったカヴァの場合、1 人で綺麗に掘り起こすことは困難である。そのため他の農家と協力して収穫することもある。現在では後述するように現金で雇った他の村人と何人かで掘り起こすこともよく見られる。収穫したカヴァは山上の水場で洗浄されキャンプ横にあるアイロンルーフで干されることもあるが、大半の場合は袋に詰め（1 袋 30 キロほど）、険しい道中を再度麓まで引き返し、自宅前のアイロンルーフで乾燥させる [写真 7]。3 日ほど乾燥させたカヴァの多くはサブサブにあるカヴァマーケットに持ち込まれ、そこで仲介業者と取引がなされる。以上が V 村落におけるカヴァの生産のフローである。



写真 6：農場のキャンプ（2024 年筆者撮影）

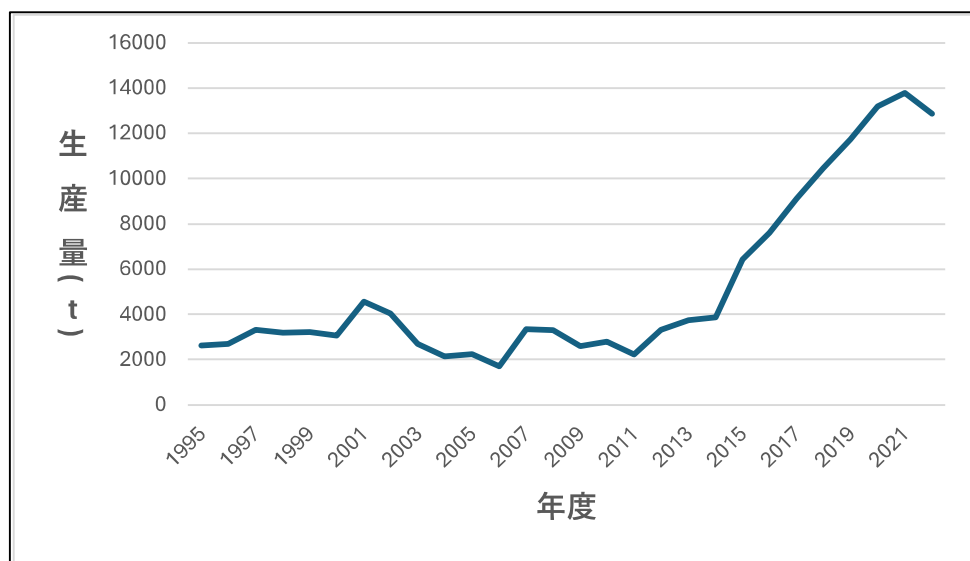


写真 7：収穫したカヴァを乾燥させている様子（2024 年筆者撮影）

### ・カヴァ生産の変容

フィジー全体の傾向として、1990年代以降、グローバル市場における取引量が一時的に増加した結果、カヴァの生産は拡大を見せた。1973年に年間1900トンであった生産量は、1998年には3,000トン超に達し [Mohanty 2017:10-11]、地元のメディアではグリーン・ゴールドラッシュとも報じられるような状況になった [Murray 2000:363-365]。その後2002年前後からヨーロッパを始めとしてカヴァの健康被害への懸念が広がり、ブームは下火になったが、現在では問題は落ち着きを見せ、次第に国外でのカヴァの需要、そして国内での生産は堅調に回復してきている。生産量、輸出量は2002年から数年は低調であったが、ここ数年変動はあるものの増加傾向にあり、とりわけ2010年以降は、アメリカを中心とした海外での需要の再拡大、および後述する災害によるカヴァの価格高騰以降、カヴァの生産量は急上昇している [表1]。調査地においても2010年代から大規模なカヴァ栽培を始めるものが複数現れており、そのことが村内でのカヴァの消費拡大に拍車をかけているとの指摘が数名の村人からなされた。

表1 カヴァ生産量の推移（出典；Fiji Bureau of Statisticsの数値をもとに筆者作成）



筆者の聞き取りによると、調査地において商品作物としてのカヴァ栽培が本格化したのは30年ほど前だった。村落では主食となるダロ芋、キャッサバを育てており、また漁場も近く魚が豊富に獲れることから、自給的生活がなされていたが（現在でもある程度まで自給的生活は可能である）、次第に砂糖などの商品や、子供の進学のために現金も必要となってきた。ココヤシを収穫し、近隣の加工工場に持ち込むことで現金を手に入れるという、

一般的なフィジー村落でも広く見られた半自給自足的生活が営まれていたが、島外の市場の状況にもかなりの程度取引価格が左右されるコプラ市場の不安定性と価格の下落により、安定した他の現金獲得手段を探す必要が生まれた。そこで一部の農家が当時市場での取引価格が高騰していたカヴァに目をつけ、徐々に市場で売られるようになった。ある 70 代の年長者の話では 1998 年にカヴァの価格が高騰し、その時にカヴァを商売のために売るものが出てきたという。それでも小規模栽培が多くを占め、大規模なカヴァ農場を営む農家は最近までいなかったという。

しかし、2016 年にフィジーに甚大な被害をもたらした巨大サイクロンウィンストンによってカヴァをめぐる状況は変化をみせた。フィジー全土で多くの人的被害があったほか、農作物への深刻な被害も発生し、カヴァもその例外ではなかった。カヴァの市場供給量は激減し、価格は急騰した。サイクロン以前はカヴァの取引は乾燥させたものに限定されていたが、サイクロン以後は加工前の生のカヴァやカヴァの苗木まで売買されるようになったという。そうした市場の恩恵を逃すまいと、村内には新規にカヴァ栽培を始めるものも見られた。V 村落出身で、スヴァの自動車整備会社で働いていた 20 代男性もその 1 人である。彼は 2016 年にカヴァの市場取引価格が 150 ドル/kg (最も高値がつく根の部分の値段) に達したときに、すぐに自動車整備工の仕事を辞め、村に戻ってカヴァ栽培をやることに決めたそうだ。その後現在までカヴァの栽培を行っている彼は、今では村で最大規模に近いカヴァ畑を耕作しており、一時は高級スピーカーを搭載した日本製の自動車を保有するまでになった。カヴァの市場取引価格は落ち着きを見せ、高価格で取引される根の部分の価格は 80~90 ドル /kg まで下がっているものの、一度の取引で 700 ドル~1000 ドル (日本円で 5 万円弱。現地の労働者の平均的な月給は 5 万円に満たないとされる) を得ている。月に何回取引をするのかは決まっておらず、現金が必要なときに収穫し市場に行くそうだ。彼は 2016 年に栽培を始め、カヴァが高価格で売り出せる大きさになるまで 2 年間の間、ほぼ休みなく畑に通い、草刈りと畑の拡張を続けたという。そして現在では村人を日当を払って雇い、カヴァの手入れから、収穫までを手伝わせている。また彼の弟も兄に習いカヴァ農家を始めており、兄の畑の隣に多くのカヴァを栽培している。弟の方は兄に比べ規模は小さいとはいえ、例えば 2024 年 10 月には 2 度ほどカヴァの大きな取引を行い、合計 15 万円ほどの収入を得ていた。

村内には、他にもウィンストン以降にカヴァ栽培を新たに始めたものも見られる。妻が V 村に親族を持つため V の土地を利用している 30 代男性農家は、2016 年からカヴァ栽培を始めた。普段彼はサブサブの街の集落に家族と住んでおり、月のうち三分の一から半分は農場の手入れのために V 村落に移動し、滞在している。新しい家を建てるため、家族の生活のためにカヴァ栽培を始めたという。ダロ芋、キャッサバ、そしてとりわけココヤシの収穫は、冠婚葬祭の時など、早急に必要なお金を得るために行なっている (ココヤシの木はどこにでもあり、かつ実の生育サイクルが早い。他方でキロあたりの単価は低い)。他

方でカヴァ栽培は、家を建てたり、車を買ったりなど、将来大きなお金を得るために行なっているという。

そのほかにも数人の大規模カヴァ栽培農家があり、全体として 10 名ほどで隣接した土地でカヴァを栽培している。その多くがカヴァ生育環境が良好な土地を保有する R マタンガリの成員であり、相互に触発されながらカヴァの耕作を拡大している。

こうしたヤンゴナ栽培から得られる収入は村落家計に大きな影響を与えている。調査協力者へのインタビューによれば、多くの農家にとって家計収入の 7〜8 割がカヴァ販売による収入で占められていた。一例として、あるカヴァ農家は「現在、収入の約 80% はヤンゴナから得ており、残りはタロイモなど他の作物か断続的な雇用収入で補っている」と語った。このような高率の依存は、ヤンゴナが事実上の主要な換金作物として機能し、村落経済の中核を担っていることを部分的に示している。ヤンゴナ販売収入により家族の学費や生活費が賄われるだけでなく、大きな収入が入れば家畜の購入や住居のための資金などにもあてられている事例も見られた。実際、カヴァ栽培集団の中の 3 人は、カヴァ販売の利益で現在新築の家を建てるための土地の整備を始めた。また上述した 20 代のカヴァ農家は妊娠牛を 650 ドルで購入し、余剰資金を家産の充実に回す様子が観察された。

こうしたカヴァの商品作物としての興隆に関して、ある 70 代の年長の村人は「私が若い頃（1970 年代）はカヴァは売るものじゃなくて、飲むものだった。大きなワカ（最も高く根がつく根っこの部分）を売ってもキロ 6〜7 ドルとかだった。コプラの方が良かったから、誰も商売にしなかった。今彼ら（R マタンガリのカヴァ農家）がカヴァを栽培しているところは、1992 年くらいに私が開墾した。ダロやキャッサバ、少量のカヴァを植えていた。今みたいに（キロ）100 ドルとかは考えられない時代だった。売らないで植えてあるから 10 年もの（のカヴァ）とかもあった。今売ったら 1 本で何千ドルになるだろう」と語っていた。

以上のことから、近年のカヴァ市場の変化によって、カヴァの生産のあり方や村落の経済構造が変化をしつつあることが伺える。

## 6. 考察および結論：カヴァ消費・生産の変容が及ぼす影響と課題

本報告では、フィジーの村落におけるカヴァの消費・生産の変容に関して明らかにしてきた。伝統的な儀礼財であったカヴァは、現代フィジーにおいて主要な商品作物として役割を担っている。またフィジー全体でカヴァの消費は毎年増加しており、村落部においても生産・消費のあり方は変化してきている。一方でこうした変化の中でいくつかの問題も生じている。まず、カヴァの過剰消費による健康被害や日常生活への影響である。日常的なカヴァの飲用や過剰消費は、生体への影響は研究では確定してないとはいえ、少なからず影響があることは指摘されている。筆者の調査中には、深夜までの飲用習慣により翌日の農作業や仕事に支障が出る例が散見された。またそうしたカヴァ飲みの習慣を否定的に



見る人の声も少なからず耳にした。V村では平日含め毎晩のようにカヴァ飲みが開催されているのであるが、頻繁にカヴァ飲みに参加し、毎月のように体調を崩していた筆者の身を案じた人からは、何度も村に行くのをやめるように言われたものだ。ただし、これはフィジー全体に言える傾向であり、カヴァの過剰消費に関しては、メソジスト教会の代表自ら警鐘を鳴らしたり [The Fiji Times:2024]、学校の教育においてもカヴァの弊害が教授されるなど、社会問題化していると言える[写真 8]。また国外の状況を見ると、上述したようにカヴァの健康問題化は 2002 年ごろからヨーロッパを中心に議論されており [e.g. WHO 2007,2016]、現在は緩和傾向にあるものの、一時はいくつかの国においてカヴァの輸入規制がなされた。そうした規制はフィジーのカヴァの輸出量にも影響を与えた。

加え、カヴァの経済的価値の高まりは、現金獲得手段の乏しい村落社会にとって貴重な現金収入源となる一方、その依存度の上昇は上述のような市場変動の影響への脆弱性を高めていると言える。さらに、カヴァ生産における担い手が特定の農家に限られている構造的な偏りは否定できない。現状耕作に適した広い土地へのアクセスがあるマタンガリの農家が限定されていることがカヴァ生産へのアクセスビリティに差を生じさせている。

本研究を通じて明らかにした村落部におけるカヴァの生産および消費の変容と課題は、嗜好品の生産・消費の急速な変化に伴うリスクやその可能性に関する基礎的な情報を現地に還元するものである。今後の研究においては、カヴァの消費・生産のさらなる変化を追跡するとともに、フィジー国外の市場や社会との関係がどのように絡み合っていくのかを引き続き注視していく必要がある。



Singh, Y. N. Kava: an overview. In *Journal of Ethnopharmacology*, 1992, 37: 13-45

WHO. Assessment of the risk of hepatotoxicity with kava products, 2007.

—Kava: a review of the safety of traditional and recreational beverage consumption. In *Food and Agriculture Organization of the United Nations World Health Organization, Rome, 2016 technical report*, 2016.

[新聞]

Fiji Sun 2024/8/24-25 “Ministers, Deaconesses to Cut Down Grog, Smoking”

The Fiji Times 2016/9/15 “Kava traders keeps up with huge demand”

— 2016/9/15 “Traders estimate daily kava spending”